

河合隼雄追悼記念式典実行委員会・人間学研究所共同研究プロジェクト
「個人の思想形成と蔵書の研究」共催
第4回河合隼雄追悼記念シンポジウム

日時：2010年2月24日（水）13：00－14：30

会場：京都文教大学 弘誓館G102教室

「河合隼雄・鶴見和子と京都文教
—その宗教性をめぐって—」

シンポジスト：ロバート・ボスナック Robert Bosnak
（ニューポート研究所所長）

濱田 華子（山王教育研究所）

樋口 和彦（京都文教大学元学長・名誉教授）

開会の挨拶：岡田 康伸（京都文教大学臨床心理学部教授）

通訳：名取 琢自（京都文教大学臨床心理学部教授）

司会：高石 浩一（京都文教大学臨床心理学部教授）



岡田康伸：

こんにちは。お忙しい中お集まりいただき、ありがとうございます。今回、人間学研究所と合同で、こういう機会を設ける事ができて感謝しております。特に、所長（当時）の鶴飼先生には、色々ご協力いただきました。今回はロバート・ボスナック先生がちょうど日本に来ておられるという事で、シンポジストとしてお願いしました。先生は河合先生、あるいは鶴見先生と、非常に御懇意であったと伺っています。それから今回は、河合隼雄追悼記念行事としては4回目になるんですが、今年度最後は「宗教性をめぐって」という事で、今日のシンポジウムが完結するのはなかなか意義深いことではないかと思ひながら、このようなテーマでシンポジウムを開く事ができるのを喜んでおります。色々自由と宗教性を巡って話し合っただけだと思います。では先生方、よろしくお願いします。

高石浩一：

どうも岡田先生、ありがとうございました。今日のこの企画は、実は1冊の本から始まって

います。これは鶴見文庫の中から持ってきた『A little course in dreams』という、ボスナック先生の書かれた最初の本です。この本の最初の見開きに、鶴見和子先生宛てのメッセージが書いてあります。この本を鶴見文庫、いわゆる本学に寄贈いただいた鶴見和子先生の書籍群の中に見つけたのが一番最初のきっかけで、ボスナック先生が鶴見和子先生と、かなり深い親交を持っておられるという事を発見しました。ボスナック先生は私どもにとっては、チューリッヒ・ユング研究所出身のユング派の先生、河合隼雄先生と非常に深い親交を持っておられた先生という事で了解していたわけですが、同時に、本学にこの本を寄贈いただいた鶴見先生とも、非常に深い親交を持っておられるという事をそこで発見しました。河合隼雄先生と、鶴見和子先生、その両方の先生に対して、様々な思い出話を持っておられるという事をお伺いしましたので、ぜひその事についてお話をいただきたいと企画しました。

実は1992年8月の18日から20日にかけて、モスクワで「黙示録に向き合う：権力と聖戦のカリスマ」というタイトルで、国際会議が行われました。このシンポジウム自体はボスナック先生がコーディネートされたわけですが、そこで鶴見和子先生がレクチャーをされ、そしてまた1993年に、同じくボスナック先生の招きで鶴見和子先生がアムステルダムの国際会議に出席されたということを、プライベートな資料の中に発見しました。今日はその時の話を中心に、お話しいただけると伺っています。

また濱田先生は、モスクワでの会議の折にボスナック先生と同行され、鶴見先生のレクチャーをその時に一緒にお聞きになっておられます。濱田先生は、これはみなさん御存じだと思いますが、河合先生が長らくその所長、責任者として関わっておられた山王教育研究所のスタッフであり、濱田先生もまたこの両先生と非常に深い親交を持っておられるので、ぜひ本日来ていただいて、その思い出を語っていただければと、お願いしました。

そうして、皆さんご存じの樋口先生です。前学長であり、そしてもちろんこのタイトルのも

とで、両先生を繋ぐお話しをしていただけるという事で、おいでいただきました。3先生方とも、たくさん思い出をお持ちで、そしてまた色々話したい事があると仰っておられますので、ご紹介は簡単に終わらせて、さっそく先生方にお話しいただければと思います。よろしくお願いします。



ロバート・ボスナック：

このとても大切なシンポジウムにお招き頂いてありがとうございます。自分にとって2人のとても大好きなヒーローについて

とお話しできる機会は滅多にありません。

樋口先生の前で河合先生についてお話しをすることができるのをとても光榮に思います。欧米では河合先生と樋口先生はお二人そろって話題になることが非常に多いんです。それから、こちらにいらっしゃる濱田先生とフィッシャー先生も、明日一緒にワークショップを開催するんですけれども、一緒にモスクワにおられた方です。河合先生と鶴見先生について話し出せば尽きることはなく、一週間経っても終わらないでしょう。けれど私には一週間という時間はありません、30分しかないんです。そこで今日は、我々が関わった3つの出来事についてお話したいと思います。

まず最初に、ワシントンD.C.のアメリカ議会図書館で行われたワークショップについてお話したいと思います。それはながらく日本の在日アメリカ大使であった、マイク・マンズフィールド上院議員にちなんで開催されたものです。皆さんの多くはこの講演についてご存じないかもしれませんが、実はこの出来事は非常に重要でして、全米で大きく報道されました。それは特にワシントンにいる政治家たちに、河合先生の考えを聴いてもらうために実施したのです。河合先生がレクチャーを日本語から英語に訳すために、夫妻は我々のサドベリーにある自宅に滞在しました。そして妻のディーニー・ボスナックが翻訳を手伝いました。

ある晩、河合ご夫妻を近くの高校のシェイクスピアの演劇にお連れしました。高校生が演劇

をしている姿を観たのですが、私は河合先生があんなに喜んでいる姿を見たことがありませんでした。

国立公文書館で講演したタイトルは「中空構造を理解する」というものでした。それは日米の企業では、どのように異なるやり方で経営が行われているかについてのお話でした。そこで実際話された内容は非常に奥深く、哲学的で宗教的な内容でした。まずお話されたのは、日本において「自」と「他」の境界が欧米ほど明確でないということでした。日本においては、「わたし」というものは必ず相手を含めて定義される、という風に仰っていました。河合先生のお話は1993年に行われていますけれども、その後アメリカの精神分析の領域でも、「わたし」というものが個々の現象ではなくて、「場」の現象であるという理解が浸透してきました。一例を挙げますと、私の同僚で患者さんが来ないという方がいましたが、どうやら来ないじゃなくて、自分が来てほしくないからそういうことになっていたようでした。後にその方は非常に奥深い形で患者を受け入れる、そういう風にオープンになることによって、患者が来るようになりました。つまり自己は「場」の一部なのです。そういう意味で精神分析は日本の自と他、場の理解に近づいてきているのではないのでしょうか。

河合先生によると、西洋では一人の非常に強力な万能的な神が存在するということです。それに対して日本の神話では、三つの神がいて、その間が中空になっている、そういう構造があると説明されました。この中空の周りにある神はバランスが大切であるという風に仰います。このことは日本人がいつも謝らなければならないことにつながります。自らの行為が常に周囲に影響を及ぼすからです。日本の文化は合意を重視して争いを好みません。それが実は、河合先生が私を日本に招いた第一の理由でした。

私は1982～3年にエラノス財団の事務スタッフでした。その時に河合先生は「日本人は寡黙ではっきりと明瞭にものを言わない。ぜひ日本に来て、ディベートをして、対決することを教えてくれ」とおっしゃったのです。私は1985年

から日本に毎年来ていたのですが、2000年に河合先生と一緒に講演したシンポジウムがあり、その中で私の仕事はだんだん非言語的になってきました。日本の影響を受けていたのです。河合先生が私に言ったのは「ボスナックさん、あなたは日本にとって役に立たない人になってきていますよ」という言葉でした。それは私にとって最大の賛辞でした。

あまり時間が無いので、何が起きたかを少しお話ししてから、河合先生から鶴見先生の話に移りたいと思います。河合先生は中空構造の危険性についてお話しされていました。危険性というのは、均衡が侵されたときに不安が高まるということです。そうすると均衡を回復する必要性が強くなり生じます。実際に起きたのは、1930年代の日本で軍が国民に「日本は神の国だ」と呼びかけたことです。つまり中空の国では均衡が侵されると、例えばファシズムなんかが入ってきて均衡を回復するのですけれども、それは非常に危険な国家を作り上げます。講演の時、河合先生はそのことをとても懸念されていました。そういうファシズムがあって、そのファシズムの中心が宗教的な考え方で、その宗教的な考え方というのが中空なのです。

というわけで、これからは宗教の影についてお話ししたいと思います。1992年に私どもはモスクワで、「Facing Apocalypse 黙示録に向き合う」と銘打った会議を開催しました。テーマは「聖戦」でした。そこには異色の参加者の方々がいらっしゃいました。日本からは鶴見和子先生、ロシアからはミハエル＝ゴルバチョフ、それからダライラマ、さらにヨルダンのハッサン王子の代表の方々などです。私にとって非常に印象的だったのは鶴見先生のお話の間、ダライラマがずっと涙を流していたことです。鶴見先生は信じられないほどの勇敢さを持っていました。彼女は彼女が見た真実のみを語られました。彼女は日本の既成権力全体に対して物怖じせずに対決する姿勢を崩しませんでした。彼女は世界中の人々、特に女性にとって輝ける模範的存在でした。以下が彼女の講演の内容です。

「私は15年戦争が聖戦であったと理解しています。まだ終結をしていません。それは日本の政府が未だに特にアジアの人々に対して償いを行っていないからです。日本人が行った悪の行為を列挙していないからです。我々日本人はどうも忘れやすい傾向があります。日本のことわざに＜過去のことは水に流そう＞というのがあります。」彼女は過去を水に流すことについては断固として反対していました。後の歴史家は必ずや、鶴見和子が世界で最初のポストモダンの歴史家であったことを示すでしょう。ポストモダニズムがフランスで産声をあげる遙か以前に、実は日本の鶴見和子がそれを行っていたのです。彼女は歴史が常に勝者によって語られていることに対して、断固として反対しました。権力を持っている者が、歴史を語るのだと。私は彼女に聞きました。「どうしてそのようなこと（時の政権に対する反対意見）を何年も言い続けることができるのですか？」彼女は言いました。「私は女性だからです。私は体制の外にいます」。

50年代と60年代に彼女は「生活綴り方」の運動を非常に支援していたことがあります。これは老若男女誰もが歴史を書くべきだ、という運動です。それは日本の傾向である「過去を水に流す」とは逆行する動きだったのです。第二次世界大戦が聖戦だという理由を彼女は、次のように述べておられます。「この戦争は天皇陛下による聖なる目的があった」。「明治憲法によると宣戦布告は天皇の権利の一つだ。天皇の力は侵されることがない、絶対的だ。天皇の名の下におこなわれたことは必ず成功すると信じられていた。というわけで戦争の目的も全く疑問視されない」ということでした。これは宗教の大いなる影であります。宗教が政治思想になってしまったということです。

時間が無くなってきたので急いでお話ししますが、鶴見先生と河合先生の繋がりについて少し述べたいと思います。鶴見先生は河合先生のご兄弟の雅雄さんを尊敬していました。それは、ある種のチンパンジーが戦わずに平和に暮らしている、それがなぜできるのかについて非常に興味を持っていたからです。後は南方の曼荼羅

とユングの関係についても語っておられます。詳しくは申し上げられませんが、南方曼荼羅という論文が残っているんですけども、そこで河合先生が鶴見先生に南方曼荼羅とユングの関連について大いに語っておられました。

次にお話したいと思いますのは、1994年から5年に鶴見先生をオランダのロイヤルバレスにお招きした時の話です。毎年オランダの王宮で女王陛下に対して、いろいろなことを報告する会がありますが、そこで光栄にも私が、鶴見先生を女王陛下に紹介することができました。そのときの講演の内容の資料を王宮職員に探してくれないかと頼んでいたのですが、職員の方が見つけてくれて、今朝その原稿が届いたのです。そこから少しお話をしたいと思います。鶴見先生は女王陛下の前で非常に質の高い講演をされたのですが、それは共生の価値観についての講演でした。そこで問題にされたのは「どのようにして人が価値観を身につけるのか？」ということでした。そこにはグレゴリー・ベイトソンとマーガレット・ミードのお嬢さんであるキャサリン・ベイトソンがいました。

そこで鶴見先生は水俣病について語られました。水俣病と、水俣病から導き出された意義についてです。宗教としての生態ということについてのお話でした。これは15年前の講演ですけども、今現在における価値は何倍にも膨らんでいると思います。問題にされたのは我々の生態系のジレンマから抜け出す為に、どのようにして重要な価値観を身につけることができるかということでした。地球温暖化がどんどん進むこの地球に暮らす我々に、どのように価値観が影響を及ぼしているかということです。彼女によると水俣病というのは世界で最初に起きた、大規模な人為的に引き起こされた環境破壊でした。日本はそういう意味で、世界で最初に起きた生態系の危機を詳しく研究する機会を与えられたのです。ここでの世界最初の危機というのは戦争を除いた上で、という意味です。彼女は水俣病の患者さんのもとへインタビューをしに行きました。そこで患者さんたちの価値観がどのように変わったのかについて調べました。患者さんの人生のストーリーを聞き出すにつれて、

そこで繰り返されるテーマがわかりました。海と共に生きる、人間の痛みを感じるだけでなく鳥も魚も山も海も、それらの痛みも感じるということ。これらのテーマは自然との共生を強調しています。

その内容については詳しくお話しする時間はありませんが、一つだけ申し上げるとすれば、水俣の人々は浄土宗であるとともに、隠れキリシタンでもあったということです。隠れキリシタンの方々については、河合先生がボストンで素晴らしい講演をされたことが思い出されます。鶴見先生が問題にしたのは、直接被害に出会っていない我々がどのようにして自然との共生をするかということです。鶴見先生が言ったことで非常に独創的だったのは、我々がまだ生まれていない人類とどれだけ共生できるか、生まれていない人類は守ることはできません。それを踏まえた上で、どれだけその人たちと共生できるかということでした。彼女の結論は以下のとおりです。これは彼女の直接の言葉なのですから「地球規模で生じている危機に対する怒りを手に入れること、そして一方で技術工業文明において、被害を被る人間、および人間以外のものの痛みと苦しみを分かち合うための意識的な努力をすることの組み合わせが重要だ」ということです。

最後に、京都文教大学が鶴見先生の文庫を敬意を持って保管しておられることについて非常に感動しました。そして河合先生や鶴見先生のような非常に勇敢な方々が追悼されることについて、非常に喜ばしく思っています。時間をとりすぎて申し訳ありません。

高石浩一：

どうもありがとうございます。鶴見先生宛のボスナック先生の本の中に、鶴見先生の勇気にととても鼓舞され感銘を受けたと、そう書かれています。その鶴見先生の勇気がどうということについての勇気だったのか、ということをお話しされたと思います。それでは続いて、その時に同席された濱田先生に、鶴見先生と河合先生に関するお話をお願いしたいと思います。ところで、ちょっと通訳の方を変えたいと思いま

す。本来は名取先生の方に通訳をお願いしていたんですけども、彼は今朝方海外出張から帰ってきたところで、ちょっと遅れられたんで、代役に通訳を代わってもらっていました。ボスナック先生の友人でもある名取先生です。お願いします。それからもうひと方、ご紹介が遅れていますが、明日のドリームワークのワークショップでお世話になるジル・フィッシャーさんという方に同席して頂いております。ボスナック先生と一緒にドリームワークをやっておられます。ご紹介をしておきます。それでは濱田先生、よろしくお願いします。



濱田華子：

濱田でございます。私はこうしたシンポジウムにあまり慣れておりませんで、一体これはどうなることかという風に思っております。私なりのサイズで色々な事を申し上げます。と思います。

鶴見先生とは、さっきボスナック先生が言ってらっしゃった1992年のFacing Apocarpusという会議でお目にかかりました。その時に何かお話をなさったんですけども、その時だってそんなにきっちり理解できたわけではないし、それからこれだけ時間が経ってしまうと、資料がないものですから、あの時は何の話をされてたんだっけという風な感じなんですね。そこで、私がなぜそこに参加したかということから申し上げますと、その前年の1991年に、ボスナックさんと私は、当時から「Dreaming in 〜」というドリームワークのワークショップやっておりました。「Dreaming in 〜」の「〜」の所に場所の名前がつきます。最初はこのDreaming in Russiaというワークショップでした。それはなんと8月の半ばに開かれたんですが、モスクワに着いた時、クーデターが起こっていた、そういう時でした。そうすると、「Dreaming in 〜」がどうなるかというのが、最初のうちは分からないのですが、そんなクーデターが起こるようなことなんてあるかしらというのが私なんかの感じなものですから、それほど恐くはないんですね。結果として、そのDream in Russiaは、

もうその最後のところで私はだんだん英語が分からなくなってきて、それでその英語を話す人たちが非常に盛り上がっておられるところを、私はそんなことを感じないというようなことを、みんなの面前で言うという羽目に陥ったんです。羽目に陥ったと言うより、それがどうも私の性質らしくて、その後いろいろな「Dreaming in ~」という回が3、4回続きましたが、たいていの場合、私は皆さんとは違うことを言う。大勢はこっちの方に進んでいるけれども、私はそっちだと面白くないというか、自分は分からないから、もうちょっとちゃんと分かるようにしてくれとかいうようなことを言っていた、ということがよくありました。

そのことを今思い出したのは、これはオランダでのお話だったでしょうか、鶴見先生とは私はその時しかお会いしたことがないのですが、鶴見先生が「自分が権力に対して反対のことを言うことができるのは、自分はあまり重要な場にはいないからそう言えるんだ」とおっしゃったんです。鶴見先生からロシアにいた時に伺ったのは、「私はおんな子どもの立場にずっと立ちます」と、こうおっしゃったんです。おんな子どもと言うのは、だいたい訳の分からない人たちと言われている、考えられている者たちです。おんな子どもの言うことだという風に日本ではずっと言われてきましたが、「私はおんな子どもが言う立場をいつも取ります」ということを鶴見先生はおっしゃいました。非常に印象的でした。

それから鶴見先生は、食事の後か何かの話の途中で、「私はアニミズム信奉者だから」ということをおっしゃったんです。そこで「私もです」と、思わず私も言いました。その時には、アニミズムというものがどのようなものかということをちゃんと考えていたわけではないんですけども…鶴見先生のおっしゃった意味も、何か自分の着ている物とか使っている物とか、物を捨てるとか、壊れてしまうととか、そういう時に、自分は例えば人が怪我をすとか壊れるとか死ぬとかいうような感じを持つのとほとんど同じような感じがするというような意味で、その時お使いになっていたんですね。

今回、河合先生と鶴見先生の追悼の意味もこめて、先生方における宗教性というテーマを頂いて、まず考えたのは鶴見先生のアニミズムということです。鶴見先生のアニミズムについて直接お聞きしたのは、非常に限られた場所で、非常に日常的な場面でしたが、日常的な場面であったからこそ、非常に先生の人間以外の物、特にその時に問題になったのは、生きている物ではない非生物というんですか、に対する気持ちというものが現れていたというように思います。そういうものに対しての、それを損なってはいけないという、或いはそういうものに対しては、人間として守らなければならないという親身みたいなものを、非生物に対しては持っていなければならないという先生の気持ちが、そこに非常によく現れていたという風に思います。

そのアニミズム、鶴見和子におけるアニミズムというのは私は今回初めて勉強致しました。鶴見先生の感じてらっしゃる事、そのアニミズムはどんなものと先生が定義してらっしゃるかという、まず第一は人間と人間以外のものとの間に何か意味のある関係がある。互酬性という風に仰ってますね。「ご」はお互いの、相互の互です。「しゅう」は報酬の酬。「互酬性」。そこには気持ちのやりとりがあるという風に先生は考えてらっしゃるのです。

それからもう一つは、自然への限らない親しみと畏れ。自然への限らない親しみというのは、例えば物に対しても、命のある物のように扱うということ。ところが人間がそうしようと思っても、そういかないこともある。これは昔話なんかによくありますけれども、人間と人間ではないものの婚姻が、悲劇に終わる場合がある。これは、自然というものは必ずしも人間のいう通りに動くものではないという意味での、ある意味の自然に対する畏れであろうと。それからもう一つは死者の魂と生者、生きている者との交通というか、接触とか交通とか。これはよくイタコとかユタとか、シャーマンのような性質を持っている人たちの間ではそういうことが示されますけれども、生者と死者の間にも交通あるいは接触が起こりうるという。これを鶴見先生はアニミズムと呼んで、こういうことを信じ

ていると定義しているわけです。これはおそらく、先生が特にそうきっちり考えなくても、日本人としてなんとなく持っている感覚ではないかなあという風に思うんですね。

これはよく私たちの間でも起こることで、「私もアニミズムを信奉しています」と言ったのも、私はあの時カトリックの教会で聖書を勉強していきまして、聖書の勉強も一応決まった課程が終わって、あなたは今洗礼を受けても大丈夫ですという認定を受けたのです。そういう時に、私はその聖書の中の言葉よりも、その時窓の外を吹いている風とか、木の葉の葉と葉が擦れ合う音とか、そういうものの方がずっと語ってくれているという感じを持っていました。そこで、私はキリスト教の勉強をずっと続けて、クリスチャンになるという道はとりませんでした。自然というものに対する親しみの方が、もっと自分にとって大事だなあと思っていたということです。この話を人にしますと、「ああ自分もそうだ」と、半数以上の方がそういう風に言われます。クリスチャンの中にそういう事をおっしゃる方も、もちろんおありです。鶴見先生もおそらく自分の使っていたものに対する感覚というようなところとか、いろいろな形で、先生は学者でいらっしゃるから学問的な考えを重ね合わせて、「私はアニミストです」という形で主張なさるようになったのではないかと思います。自分の感じたことを、先生の言葉をお借りすれば、おんな子どもの立場から、いつでも真っ直ぐに言うということが、鶴見先生がずっと取っていらっしゃる立場ではないかと思っています。

水俣病の学術調査の調査員に加わられた時に、非常にそのことを強くお感じになったということを、先生のお書きになったものから、私は感じ取れました。オランダで女王陛下にご親交を得た場面でも、それを話されたのではないかと思います。鶴見先生は水俣病の調査に加わった時に、自然とのつきあいを回復しないと人間は滅びると、自分としては強く感じたから、これからエコロジストとして、言葉をずっと続けていくとおっしゃったことが、今回私の読んだ本の中にありました。

もうお一人、河合先生の方は、最初にお会いしたのは1978年の5月で、山王教育研究所のサイコセラピーセミナーの講師としておいでになった時です。残念ながら、この時何のお話を伺ったかよく覚えてないのですけれども、それから1994年の4月から先生は山王教育研究所の所長として2006年、病に倒られるまで、ずっと代表を務めて下さいました。これは私たち（山王教育研究所のスタッフ）にとっては、本当に恵まれたことでしたが、毎月、私たちはケースのスーパーヴィジョンをしてました。グループスーパーヴィジョンではありますが、必ず月に1回はおいで下さいました。これほど臨床心理士として恵まれた場はありません。常に非常に大きな先生の教えを頂きました。

先生は2000年にアメリカ西部のナバホにいらっしゃいました。そしてナバホが自然と共に生きているということが、臨床心理士、心理療家家の自分に非常に大きな影響を与えたと仰っています。2000年2月に一週間ちょっとおいでになって、8月にまたお出かけになるとお聞きしたものですから、私は先生に連れて行って下さいって申し上げたのです。そしたら「いや〜」って。私がお世話しますからって言ったのですが、先生は「あんたなんか世話を焼いたら身が縮むよ」と仰って笑い飛ばされてしまいました。なぜ私がそんなことを言ったかといいますと、私は1966年にアメリカを2回車で横断しているのです。東から西へ、と西から東へと。東への帰りがけに、グランドキャニオンに寄りました。二日ほど滞在し、一緒だった友人が別れてサンフランシスコに帰るので、すぐ近くの長距離バスのバスストップに友人を送って行きました。そのバスストップにあったのが、モニュメント・バレーというナバホインディアンの居留地の写真でした。ここへ行こうと思い立って行ってみました。そこは砂漠の真ん中ですが、ナバホインディアンのリザベーションとしては景勝地の一つです。砂漠と言ってもグレーの砂漠ではなくて、煉瓦色の真赤な砂、そこにちっちゃな灌木が生えているような所でした。その赤い砂漠に私はなぜか非常に、心惹かれました。

その翌年、67年に日本に帰ってくる時には、

7週間ほどヨーロッパを車で旅行しました。ヨーロッパの田舎もきれいです。都会は都会でみごとな場所もたくさんあります。美しい町並み、荘厳な建物、緑滴のような景色はいくつも見ましたが、あの赤茶色の砂漠が私としては一番心に残ります。それ以降私は、実家はモニュメント・バレーにあると言うことにしました。私はスクウォーでした。インディアンの女性という意味です。アメリカ西部を旅行していたときは、日焼けしてまるでインディアンの女性みたいでした。心の底ではどこかに、自分はスクウォーだと、ずっとそう考えています。

河合先生がナバホにいらっしゃって、色々と心理療法家としてナバホの人たちの生活をご覧になり、お書きになった『ナバホへの旅—たましいの風景—』という本があります。これをお読みになると、どんな風にナバホの人たちが生活をしているかということが非常によく分かります。自然との共生と言いますか、ナバホの人たちは本当に共に生きていく生き方をしていると思います。

個人的なことを色々お話しして、先生がここでどんな風に過ごされたかということをお書きになっているか、ちょっとご紹介する時間がありませんけれども、もう時間になっております。

高石浩一：

ありがとうございます。鶴見先生のアニミズムについてのお話、特に生き物と無生物との間の多様なものが共生するんだという発想は、私が河合先生の研究室にいた時に、ユンギアンであれ、フロイディアンであれ、或いはウィニコットを勉強する人、メラニークラインを勉強する人、もういろんな学派の者が我々の研究室の中にいたんですが、河合先生はそれをまるごと抱えておられた。多様なものを全部抱えておられて、そしてそれを全部認めてもらえていた。そういう自分たちの過去の研究室の雰囲気と、共通するものを持っているようにも思います。河合先生や鶴見先生も含めて、あらゆるものの多様性ということ、共生ということを考えておられたのではないかと思うのですが、こういった点については、樋口先生が20分では短すぎる、

今日は大急ぎでしゃべるんだと仰って頂いていきますので、それでは次に樋口先生、お願いします。



樋口和彦：

私のところに来るまでに時間がなくなっちゃうんじゃないかと思ってましたけれども、多少残っておりますので嬉しく思います。よろしくお願いします。ボスナック先生と久しぶりにお会いすることができ、先程のお話に非常に感銘を受けました。そのことをお話ししますと数限りないので、時間がなくなってしまう。これは私に対する誘惑ですので、きっぱりとカットします。

今回は河合先生と鶴見和子先生の追悼のシンポジウムでありまして、私にとっては何回目かの河合先生の追悼シンポジウムです。おそらく語っても語っても語り切れない、今後まだまだ語っていくのではないかと、これが私のグリーフワークではないかと思ってます。しかしやっとなんかそこから離れて、自分の語りたいことを語れるようになってきたので、今日はそれについて語りたいと思っています。思い出は一切抜きにいたします。

今日みなさんに語りたかったのは、河合先生の宗教観ということです。私はクリスチャンであります。キリスト教の信仰的な立場から、これを見るとどうなるか。私は、河合先生の宗教は、特定の宗教信仰にとどまらなかったということが一番第一印象に残ります。私はクリスチャンですから、キリスト教主義の学校に行って教えたこともあるんですけど、その時の女学生達に河合先生の本を課題で出して、レポートを書いてもらったんですね。そうしたら学生達が「さすが河合先生はクリスチャンだけあって…」という風に書いてきました。あまりその回答が多いので、私の知らない間に私の影響でも受けて、河合先生がクリスチャンになったんじゃないかと思って、本人に聞きました。「先生、クリスチャンですか?」、「いや、どうしてそんなこと聞くの?」、「私がレポート出したら、」

ってというのがものすごく多かったですよ。」「はあ、そうかね。」と言ってニヤニヤと笑ってたんですけども…。

彼はキリスト教というものを非常によく知っていた、私の目から見てもよく知ってたし、私ばかりでなく周りのクリスチャンが彼と接しても、「河合先生は私達の信仰を理解してくれている」という風に充分思っていたと思います。ということは、彼は特定の信仰宗教にとどまっていなかった、これが第一ですね。

第二に彼は、中に秘められた深い内省的な熟慮というものに絶えず裏打ちされていた。寝たような、目を閉じたような、そういう時にいつも彼はスッと自分の中に入っていって、非常に深い所をまさぐって、そして熟慮しながら、何も答えないときもあるし、「I don't know.」と言ったり、あるいは非常にひらめくような言葉を言ってくれる。この自分の内的な深い所をまさぐって、そこから何かを言葉として取り出して我々に伝えてくれる、こういう宗教性を彼は持っていたのではないかという風に思います。彼は特に仏教に造詣も深かったけれども、他の信仰に対しても同様でありました。おそらく天理教に対してもそうであったし、様々な宗教に対してそうだった。だから、下手なクリスチャンよりもずっとキリスト教というものを理解していた。1つの宗教集団というものへの偏りというのは持っていなかった。

むしろ私が印象に残っていたのは、1つの信仰に偏した人、特にそれにのめりこんだ人に対して極端な軽蔑といいますか、嫌い方をしていた。しばしばその顔を傍にいて見たことがあります。クリスチャンの中にも、カンカンのクリスチャンというのがいて、彼に喜んでもらおうと思って、そのことを言ったりするときに、明らかに彼は、「嫌」とは言いませんでしたけれども嫌な顔をしました。そして、ユング自身も同様であったと思うんですけども、自分の個人の宗教的な核心にあくまでも立ちながら、他に対して寛容でした。

先程からアニミズムの話が出ておりますけれども、では河合はアニミズムというものを日本宗教として認めていたか、これについては、ち

よっと私は疑問だと思っているのです。もちろんそれはそれとして認めていますけれども、私にとってアニミズムというのは、もう少し文明社会から離れた所で残されているところの自然信仰のように思います。後でこれは述べます。しかし、高度の産業社会においても、アニミズムというものが淘汰されてしまったとするならば、別の形のアニミズムというものが高度産業社会の中に現に生きている。彼が興味を持ったのは、むしろその点ではなかったかという風に思います。

これは、日本人の持っている無宗教性を含めた現代の豊かなイメージとして生かされているところのものである。例えば、彼は児童文学とかアニメとかそういうものに強い関心を最初から持っていて、その中で生かされているところのイメージというものの宗教性に、非常に強い関心を持っていたのではないかという風に思いました。

ここでちょっとボスナック先生について私の印象をお話したいんですけども、彼とはずいぶんたくさんお会いしています。彼の家にも行きましたし、彼は私の家にも来ましたし、同門の仲間としてお付き合いしてきました。彼はオランダのライデン大学で法学を勉強し、そして今度は心理学者になって世界中を飛び回り、そしてその時々の世界の非常にホットな問題を取り上げて、宗教的な関心を持って追いつけている世界人であるという風に私は思っています。その一つを私が体験したのは1991年、ちょうどパールハーバーの50周年があった時で、その当時日本はワイキキのビーチのホテルをみんな買ってしまったたり、あるいはエンパイアステートビルを買ったり、日本が非常に有頂天になっていた時でした。それによって日米摩擦が起こって、実はパールハーバーの記念日に非常に不穏な空気というのがあったんですね。それをマンスフィールド財団が非常に心配して、日本の電通を中心としたマスコミ集団と、アメリカのABCとかが一流のニュースキャスターをハワイに招いて、合同の会議をやったわけです。その時に両方のマスメディア、いわゆるイメージを取り扱う人たちを、ただぶつけてもそれは摩擦

がますます強くなって、なんら生産的なことは生じないという風に思って、ボスナックさんはアメリカを代表し、私は日本側の心理学者として、二人が協力して、今彼らが言っていることは、彼らの言葉で、インタビューするとどういうことを本当に言わんとしているかということをお互いに協力しながら中に入って行ったわけです。それをジョン・ダワーという『敗北を抱きしめて』という日本の敗戦後のヒストリーを書いた歴史学者が、非常に有意義に描きました。その時に我々心理学者が、ちょうどペイシェントの普通に話す言葉は他の人たちには理解できない、違う内容を違う言葉で言う、それをもう一人誰かがそれを聴いて、人々のわかる言葉に翻訳し直すということ。それを通して、物事の解決を図っていくということの重要性、そしてそれが1つの国際舞台の中で取り組まれることの重要性、その試みをやっていく世界人としての実行力というのがボスナックさんにあったということです。その結果がどうであったかはわかりませんが、ただ心配したような大きなことは何も起こらずに、この記念すべき日は無事に通過して、今日に至っているということです。

これが1つ思い出すことでありますけれど、その時もそもそもつかみどころのない日本宗教というのは一体何なのか、どういう風に世界の人に理解させることができるか、という問題があったと思います。みなさん御承知のように、宗教には創唱宗教と自然宗教というのがあります。創唱宗教というのは神学があって教団があって、そして理念がきちんとある、そういう宗教でありますけれども、自然宗教というのはそういうものではありません。河合さんは、イメージが非常に豊富で、西洋宗教から規定しにくい日本独自の宗教性というものに非常に強い関心がありました。そして現代に生きている民衆の宗教というものに、同時に彼は興味を持ちました。先ほど言いましたように、例えば無宗教者の持っている無宗教という宗教、これをまた日本のインテリは強く信じているわけですが、これが一体何であるか、なぜ日本人はこのような宗教音痴になってしまったのか。日本

人の無宗教の根底にはどんな宗教があるのだろうか。これはとりもなおさず21世紀の現代人の心性に通底しているものがあるわけです。

結論を言うと、彼がどこまでも目指したのは東西宗教の習合、どういう違いがあるのか、そしてどういう風に理解し合えるか、そしてさらに進んでそれを統合することはどういうことかを考えていたのではないかと思います。己を深く知る者こそ、また他を知ることができる。反対に己を知らないで軽蔑する者は、他をまた軽蔑するということになります。

彼の著書の一つである『明恵 夢を語る』、これは彼の作品の中の最高傑作の一つであると私は思いますけれども、この中で彼は日本仏教の弱点を摘出しています。ご存知のように明恵というのは華嚴宗徒でありました。そして日本仏教の歴史を見ると、中国から我が国に仏教が入ってきた時に、いろいろな変化が現れております。その一番は、戒律というものを意識的に排除した点であります。肉食を許し、絶対的な禁忌というものを人々に設定することをしないで、日本仏教というものは今日まで続いてきました。人間というのはどこかで戒律とか立法とか、そういう禁忌があったときに初めて動物とは違う、できるけれどもやらないということにおいて人間であるという、そういう性質を持っています。

それでは平安時代に渡来したところの仏教の流れはどのようにきたか。明恵の中で彼が指摘している点は、北条泰時の貞永式目、これは足利幕府から徳川末期まで武士道として法律を存続的に保ってまいりました。すなわち、“武士は食わねど高楊枝”というこの高い倫理性というものが、明治が始まるまで日本の社会をずっと守っていたわけです。この高い倫理性に対する関心は、いろいろな面で今日まで守られてきています。また世界的に見ても、日本の武士道というものに対する倫理性の高さというものを、もう一度見直そうとする観点がございます。この戒律と欲望というものの相克を、どういう風に今日において解決するか、欲望をどのように規制するか。これは国家の方でやるのか、あるいは人民の掟でやっていくのか。現代の21世紀は、20世紀から受け継いだ力、パワーとエロス、

この力をどのように我々がコントロールするかという、この課題にずっと取り組んでおります。20世紀は戦争とか性の暴力とか、そういうことによって翻弄された時代でありますし、今日の21世紀に入っても、世界中にこの倫理性の欠如というのを見ることができます。先ほどからお話になっているような鶴見和子先生の水俣研究、こういうものが指摘されましたように非常に大切な問題であり、また現代産業の非倫理性の証左でもあります。

ここでちょっと申し上げたいのは、私が学長をしておりました時に、この鶴見和子先生の寄贈文献を収めることができました。今回もその研究の一端であります。このインパクトというものが大学ではなかなか成立しないんですね。今回もシンポジウムであって、大学の授業ではありません。何かの文化的な起爆力というものを秘めたときに初めてその大学が社会に対して、日本の大学として価値を持ち得るのではないかと、それを鶴見和子文庫というものが果たしているのではないかと。その一端を私が果たさせていただいていることは、非常に光栄であって、今、嬉しいという風に思っております。それについてはもう1つ、和子先生の弟君の鶴見俊輔先生は同志社時代からずっとご一緒してたんですが、ウィルソン研究の研究者であられた。このウィルソンという人は、非常に不思議なアメリカ人でありまして、今アメリカ人の中にもあまり研究している人はいないのではないかと思います。現在この大学には、1つの部屋いっぱい、お父さんの方の鶴見先生の図書がたくさんございます。結局彼の世界主義というのは、国際連盟でせっかく力を得て働いたのですけれども、敗れたということになっております。おそらくこれはアメリカ研究の中で今後ものすごく大事なものになっていくのではないかと思います。

現在、みなさまご承知の通りリーマンブラザーズの破産、それから世界的な経済秩序の破綻が進行しております。しかもこれは解決不能な世界的な課題になっております。この本質というのは、人間の欲望というものの無限の肥大化をどのようにしてコントロールするかという問

題であります。神の見えざる手が今、見えないということの衝撃であります。現代というのは、私にとっては神の支配する世界を神なしとして了承する、これが現代人の課題であると思います。本当に我々はこれを了承できるのかどうか。今までの経済は人間の活動を自由にすればするほど、自然の均衡を保てば保つほど、排除の原理というものが働いて自然に平衡は守られるという風に考えられていたのが、実はそうではなく、果てしない破滅の中に入っていくことがある。この破綻が今現在進行中であります。

このように考えてまいりますと、河合先生の視点はユングの視点と同じでありまして、人間の内的世界と外的な世界は、同等な広がりと深さを持っている。我々が分析家として一人の人間を相談室の中に招き入れるということは、即ち世界を招き入れるということでもあります。ですから、我々は絶えず世界の情勢というものを知らなければなりませんし、そのための訓練を自らに課していかなければならないのです。

時間がありませんので、端折りますけれども、私は宗教原理的に、あるいは思想原理的に、今の世界を規定している、我々があまり重要であると思っていない3つの点というものを指摘したいと思います。1つは、ニケア・コンスタンチノーブル宗教会議が381年にありまして、これが中世ヨーロッパ世界というのを作った1つの重要な転換点であります。次にウェストファリア条約によって、ヨーロッパができたのは1648年10月24日、ここで国民国家体制というのできるわけです。破綻やほころびはありますが、これはずっと今日まで続いてきたわけでありまして。ところが3つ目に、2001年9月11日に、この国民国家というものが破綻して、現代世界というものが世界全体として裸のまま晒されるということが起こったわけでありまして。これを支配するものは一体何なのか、掟なのか救済なのか。そのための生贄の犠牲というものは何なのか。それは貧困であるか無知であるか弱者であるか。この現代の宗教的な苦しさは、同時に人間の中の心の中の問題として、内的世界の問題として現れるのであります。河合先生は、絶えず一分析家として、人の一生を通して、

その世界の癒しに努められた人でありました。

最近面白いのは、ニューズウィークの2月17日号に、人生カウンセラーというのがアメリカに現れて、ライフコーチと呼んでいるそうです。心理学者があまりにも専門的になって人間の断片しか扱わないので、今我々が必要としている人生全体を指導する人間が要請されている。それはライフコーチといって、すでに1万5千人いる、ということが言われています。

この21世紀の最大の課題は、先ほどパワーとエロスと言いましたが、パワーは戦争とか破産とか家庭内暴力、様々な形の現象として現れています。ユングはエネルギー論の中で、目的的能量というのがある、我々の中で働いているエネルギーは無目的なエネルギーではない、それは1つの目的を持っている、一人一人の人生の中でその目的を実現するという目的を持っている、と述べています。

内的探求によって一人一人が自分自身の深い宗教的なものに裏づけられた人間となるように、外から見ただけではなくて、内側からも見るということ。またこれは主観性に陥る危険性がありますから、同時にそれは外側からスーパーヴィジョンをするということ。そのための臨床教育というものが要る、ということによって、この大学も建てられましたし、今後もこういう活動が続けていかれるのではないかと。それは大袈裟に言えば、即、この世の中、世界を救済することにつながるのではないかと思います。

以上、ちょっと端折りましたが、私の言いたいことをお話させていただきました。ありがとうございました。

高石浩一：

ありがとうございました。皆さんの方からご意見やご感想など、承りたいとは思っているんですが、ちょっと時間も過ぎております。宗教

についてのお話、そしてこの大学が果たすべき役割について樋口先生にご高唱いただいたという風に思います。最後に、本学の鶴見文庫の研究班の班長でもあります人間学研究所所長（当時）の鶴飼先生に、感想を一言お願いいたします。

鶴飼正樹：

ご挨拶が遅れました、鶴飼です。今日は、3人の方から本当に貴重なお話を伺いまして、ありがとうございました。時間も来ておりますので、非常に短い感想になりますけれども、最後に樋口先生が仰ったようなグローバリズムの時代、ボスナック先生が仰っていましたエコロジイの時代において、本当に今こそ河合隼雄先生と鶴見和子先生のお二人の思想というものが、ますます重要性を増してきているのではないかとこの事を改めて感じました。お二人から、この京都文教大学は非常に貴重な贈り物をいただいたのではないかと、という風に考えております。これからその贈り物を大切に育て、更に大きくしていく事が、私たちのこれからの仕事ではないかと改めて感じました。本当にどうもありがとうございました。

高石浩一：

ありがとうございました。それでは皆さん、シンポジウムの先生方に温かい拍手をお願いしたいと思います（拍手）。

どうも本日はお忙しいところお集まりいただきましてありがとうございました。来年度も引き続き河合先生の追悼シンポジウムを企画していければという風に思っています。今年度の最後の第4回のシンポジウム、みなさん御苦労さまでございました。どうも先生方、ありがとうございました。